

公募メンバーからの意見発表について
(第6期公募メンバー 1回目)

氏名	頁
齋藤 朱未 ……	1
田端 俊三 ……	2
西山 直美 ……	3
丸尾 正子 ……	4
宮元 亜紀 ……	7

意見発表様式

氏名	齋藤 朱未
テーマ	多様な人にとって安全安心な鴨川にむけて
意見	<p>まず、この2年間鴨川府民会議のメンバーである利点と大学教員という立場を生かし、授業の場で鴨川を取り上げ、その際に関係者の方にお世話になりましたこと、お礼申し上げます。</p> <p>私が本会議に参加させていただき、また授業等で学生と一緒に学び、検討した中で考えたこと、感じたことは「防災」についてです。私自身が東日本大震災の被災地における復旧・復興に関し調査研究を行ってきたことも影響していると思いますが、近年の豪雨、長雨による水害被害とその対策については、緊急を要することだと考えます。京都府のHPにおいて浸水想定区域図が公表されていたり、私の住む地域（学区）では毎年のようにハザードマップや避難場所が掲載された地域地図が配布され、いざという時の情報提供はなされていると思います。しかし、京都という土地柄は地元住民だけを考えていい土地柄ではなく、土地勘のない多くの観光客が往来する場、多様な人に対する水害対策が必要であると考えます。</p> <p>大学の授業でも、鴨川がかつては「暴れ川」と呼ばれていたこと、氾濫を繰り返し住民への被害をもたらしていたことを学生に伝えると、多くの学生が不思議そうな顔をします。“現在の鴨川からは想像ができない”との声を聞きますし、イメージがわからないのかもしれませんが、ですが、実際にDVDを観たり、資料等を見ることで、当時の被害の様子を目の当たりにし、想像以上の大事だということに気づく学生がほとんどでした。それとともに、京都に通ってはいるものの、“普通の通学だといざという時にどこに避難すればいいのかわからない”“看板が設置されている近くにはいないと立ち往生してしまう”“観光客や外国人はパニックになるのでは”といった声が聞こえました。授業では、それらの意見を踏まえて、まちづくりの一環として学生が観光客に向けたハザードマップの配布手段を考え、観光情報を盛り込んだマップを検討・作成してみるということを行いました。</p> <p>しかし、それだけでは情報提供だけの十分な水害対策とは言えません。観光客などに対する、いざという時の地元住民の対応方法についても検討しておくことが必要なのではないか、ソフト面での対応方策はまだまだあるのではないかと考えています。</p> <p>今後の鴨川における防災、水害対策について、更なる議論がなされることを期待いたします。</p>

意見発表様式

氏名	田端俊三
テーマ	(少しでも被災被害を軽減するために) 「まさか自分が・・・」にならないように、ふだんから見守りましょう
意見	<p>今年も、台風や洪水で決壊・浸水などのニュースが日本各地を駆け巡りました。そして、被災者の多くの方々の「まさか自分がこのような災害にあうとは思っていなかった・・・」という言葉が重く感じられました。</p> <p>「あつと言う間に、急激に変化するので」、避難が間に合わない。つまり、心も含めて準備が追いつかないということです。</p> <p>そこで、ふだんから鴨川河畔を歩き・眺めて「天候によって変わる鴨川のその姿・状態を知ること」で、「違和感」を持てるようにすればと思います。</p> <p>わたしは「違和感」を覚えることから避災が始まると思います。しかしながら、鴨川河畔を眺めるだけに流域の人たちがやってくるとは思いません。</p> <p>たとえば、河畔の何ヶ所か場所を特定して毎月定期的にそこで様々なイベントを開催する。流域の方々が河畔にイベントのためにやってきて「先月にくらべたら流れの水が少ない」とか「この前の大雨で中洲が大きくなったなあ」とかを感じ、意識して鴨川を眺められるようになればいいのではないかと思います。</p> <p>なお、イベントの主催希望者を公募し、府民会議等で選定を行う。</p>

意見発表様式

氏名	西山 直美
テーマ	「鴨川」をただの「川」から「わたしたちの鴨川」にするためにできること
	<p>「鴨川」が素晴らしい「遊び場」であり「学び場」であることは広く浸透しつつある。しかし、その中で、「わたしたちの鴨川」という意識はどれだけ根付いているのだろうか。先人は「鴨川」を「京都の素晴らしい財産」と考え、大切に守り育ててきた。その思いは、誰かに教え込まれたわけではなく、「鴨川」で遊び、過ごす中で自然と育まれたのではないか。「鴨川」をただの「川」から「わたしたちの鴨川」にするには、まず、人と「鴨川」とが出合い、「鴨川」について知る機会を増やすことが重要だと考える。</p> <p>暮らしの中で、人と「鴨川」とが出合う場面を増やす</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合庁舎のロビーや図書館・駅・バス・電車など「鴨川」のPR 広告、イベントのポスター、「鴨川探検隊」の案内を掲示・陳列してもらうのはどうか。ただの待ち時間や生活空間が、人と「鴨川」との出合いの場になる。 ・「府民だより」や「市民だより」に「鴨川」に関するコラムを連載してはどうか。京都土木事務所の「鴨川真発見記」というブクも活用できる。 ・「鴨川探検隊」は年4回ほど活動している。その中で継続して参加している人はどれくらいいるのだろうか。たしかに、「一回でも行ったことある、知っている」という人を増やすことは大切だ。しかし、回数を重ねて参加するロピーターを育てることも重要ではないか。継続して参加した人には「鴨川探検隊カード（仮称）」を進呈するなど何か特典を設け、より深く「鴨川」について考える子どもや家庭を増やすきっかけを作ってはどうか。 <p>※中高生やシニア向けの「鴨川探検隊」の開催も希望</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「鴨川」について、人々に伝えたいことや知ってほしいことを“まゆまろ”や“ポリスマロン”などのブクやイタで紹介してもらうのはどうか。「ハッシュタグ#」をつけておくと、SNSなどで「鴨川」に関する情報を見つけやすい。 <p>まとめ</p> <p>「鴨川」を、ただの「川」から「わたしたちの鴨川」にするには、まず「鴨川」と出会うきっかけを作り、身近に感じてもらう必要があると考える。その際、正確な情報を集めやすく、見つけやすい環境作りが不可欠だ。人々に対し、情報の提供の仕方をさらに工夫すれば、「さあ、鴨川に行こう！」と出掛ける人が増えるかもしれない。そして、「鴨川」の「楽しい」面ばかりでなく、その歴史や先人達の思い、現在鴨川に関わる人の思いも学べる機会が増えればよいと考える。</p>

意見発表様式

氏名	丸尾正子
テーマ	1. 下流域 2. 鴨川公園 葵地区
意見	別紙2枚

下流域

会議に参加させて頂き、鴨川で多くのプロジェクトが進められていることにまず驚いた。一番印象的だったのは、現地調査で訪れた最下流の、桂川との合流地点の手前で、左岸の住宅地が眼下に見える、いわゆる天井川の風景である。見慣れた鴨川とは異なる、閑散とした寂しい景色が遠くまで広がっていた。上流域、中流域には溢れた水の逃げ場が少なく知り、急勾配の町中を流れ降りた水が、最後にここで受け止められ、桂川へと合流していくことがわかった。ここが、はじめての現地調査で訪れたどこよりも危険に見えた。災害時に流木、土砂、ゴミ等が押し寄せれば、左岸に広がる住宅地は大丈夫なのか？桂川からの大きな逆流はないのか？同時に見晴らしの良い、静かな広大なこの場所だからこそ、様々な防災の可能性もあるようにも思えた。

柵野公園のように、平時は運動グラウンドなど人が集まる場として、また災害時は水の逃げ場としての利用もあるが、まずここが頼りになる、気になる場所と思わせる工夫が必要であると思う。上賀茂橋近くに住む私は、春夏秋冬、賀茂川が気になってしかたがない。あたり前のように足が向き、眺め、肌で感じる周りの景色は、何物にも変えがたく、美しい。橋を渡りながら水面をのぞくと、思いがけず一尺ほどの大きな鯉を見つけたりもする。このあたりの景色は西の嵐山、桂川にも負けていないと思う。これも関係者の皆様のたゆまぬ日々のご苦労と、工夫があつてのことである。下流域にもまずハードとソフトの両面で、人々の関心が集まり、何度も行きたいと思う仕掛けがあれば、自然に必要な意見が生まれてくるはずだ。

今、日本中がにわかにファンになり、京都にもご縁の深いラグビーをはじめ、様々なスポーツの練習場や、広さを生かして大風揚げ大会の会場など、市民から希望を募れば、様々な案がたくさん寄せられると思う。

例えば下流から上流まで鴨川を往復するような、「鴨川マラソン」が開催されれば、全国の参加者に、南から北まで鴨川全体を体感して頂けると思う。たくさんのお手伝いもゆったりした河川敷があるし、下流域のここがスタート地点でゴール地点なら、この場所の存在や可能性を大きくアピールすることができる。

ここ数年、あたり前のように繰り返される全国の災害の多さに、大きな不安を感じている。「京都は千年の都だからこれからも大丈夫」というほとんど根拠のない拠り所を頼りに、今年もなんとか大きな被害は少なかったと、胸を撫で下ろしてはいるが、全国の風水害のニュースを、毎日のように目の当たりにして、とても人ごととは思えない。同じようなことが起こり、変貌する京都の町の姿は想像するだけで恐ろしい。想定外の豪雨での犠牲者も、台風の通過ごとに、毎年確実に増え続けている。どうしようもない自然災害を相手に、このままでは災害多発列島になってしまう可能性もある。安心できる日々の暮らしの基盤があつてこそその幸せで、このように続く災害の不安は、実質的な経済損失のみならず、精神的に将来の希望を奪い、今を生きる気力を萎えさせる。将来この下流域は、きっと縁の下の力持ちのような、大事な頼りがいのある場所になるにちがいない。今後も川底を掘り下げ、堤防拡幅などの改修工事が続けられると思うが、目立たないこの場所こそ、今後備えて優先して整備をお願いしたい。今までにない根本的なインフラ整備と治水事業を、早急に具体的に進めて頂きたいと思っている。

令和元年11月8日 丸尾正子

鴨川公園 葵地区

黒松が生い茂る細長いこの場所は、通り過ぎるたびに、ずっと気になっていた。

薄暗く立ち入りを拒むような雰囲気があり、北に隣接する世界遺産下鴨神社や、重要文化財旧三井家別邸の、堂々とした厳かな華やかさとは、明らかに異なっていた。

手付かずの状態も、何か深い事情があるのだろうと、いぶかしく思う人も多いと思う。

整備計画が進められていることを知り、どのように変わっていくのか、期待と同時に不安もある。

ここは鴨川と高野川の大切な合流地点であり、神社の参道の始まりの場所でもある。

ふたつの川が神社を抱き、神社もまた無事を祈り、お互いを守り合っているようにも見える。

黒松は古来、海岸線や河川近くに植えられ、風水害から日本人の暮らしを守ってきた。

水とご縁の深い樹木である。またほとんど手入れのいらぬことでも知られている。

7万本の松で有名だった陸前高田の黒松林、東日本大震災の折、最後まで頑張った奇跡の一本松も、皆の心に残っている。2017年からそのDNAを受け継ぐ松ボックリで、新たに植樹が始まったが、以前のようにするには百年以上かかると言われている。

葵地区の松林も幾年月、災害風雨に耐えて、今の姿を伝えている。

また黒松が日本古来の吉祥事や、能楽などの芸能や、寺社などの神聖な場所に欠かせないのは、神の寄りしるとして別格に大切に扱われてきたからである。

旧三井家別邸は昔、ここに三井11家の先祖を祀る神社があり、三井家だけの参拝休憩所として用いられていたもので、下鴨神社同様、神聖な祈りの場所であった。

糺の森を守りたいという、三井家をはじめ、多くの人々の強い確かな思いが感じられる。

この場所が議題になった時から、何かこの場所にふさわしい、憩いの場の目印となるような、モニュメントをと考えてきた。ここを何か華のある、明るい憩いの場所にしてほしかったからだ。

しかしありきたりの、どこにでもあるようなもので、果たして意味があるのか？

何かずっともどかしい思いがあった。目印だけのモニュメントには違和感があった。

それはこの場所ならでは、納得できる必然性が感じられなかったからだ。

漠然としたそんな想いを抱えながら、自然にゆっくりと意識の底から、やむにやまれぬ想いで湧いてくる特別の熱い感情があった。それはここ数年ずっと続いている、風水害の犠牲者が尋常でないからである。今年の台風だけでも100名を超え、行方不明者も多く、なお傷ましい。

「京都はおかげさまで・・・」と言葉を返すたびに、後ろめたい気持ちが残る。

東日本大震災の頃からその想いは確実にありながら、あまりの被害にあえて目をそむけ、押し殺してきた感情だった。神聖なこの場所に、水の神様を鎮め、風水害で亡くなられた全ての方々の御霊の安寧を祈るための慰霊碑を、ゆかりの方々の静かな祈りの場を、考えて頂きたい。

京都らしい控えめで上品な、心休まる場を。公共の場所で、このような慰霊碑の建立が可能なのか、まったくの浅学で知識もないが、熱い祈りの心に希望はあると思っている。

京都も昔、鴨川に架かっている橋のほとんどが流され、犠牲者もでた昭和11年の大水害をはじめとして、近年も台風の被害は毎年のように続いている。幸い京都は昭和のような大難は、なんとか逃れさせて頂いているが、とても心穏やかではいられない。たくさんの温かい賛同の心が集まってこそ、意義ある慰霊碑なので、クラウドファンディングなどが可能なら、近い将来、実現も夢ではないと思う。訪れる方々の憩いの場であり、祈りの場であり、いつも若者でにぎわっている鴨川デルタの明るさとも調和する、新しい静かなゾーンが整備され、北に控える歴史と文化の物語の場の雰囲気をも損ねることなく、生まれ変わる鴨川公園を心待ちにしている。

令和元年 11月8日

丸尾正子

意見発表様式

氏名	宮元 亜紀
テーマ	次世代への働きかけ
意見	<p>私がこの会議に参加させていただくにあたって提出させていただいたテーマは「鴨川的环境保全活動に、より多くの人に参加できる工夫を」ということでした。私自身京都在住の一市民として数十年育ってきましたが、鴨川への存在はあって当たり前で、あまりに身近すぎるがあまり、特別意識を向けることはありませんでした。しかし、この府民会議の存在を知ったことにより、鴨川の自然、環境、防災が様々な人の手によって守り続けられていることを感じ、こうした現状をより多くの人を知ること、鴨川流域の環境保全にもつながるのではと考えたのです。</p> <p>活動を広めるために「クリーンハイク」や「鴨川探検隊」「鴨川四季の日」などが現在行われています。しかしどの活動も基本的に参加者を募る形となっており、もともと鴨川に意識がある方の参加に偏りがちになるのではと考えるようになりました。現在の活動の継続は大切にすべきだと思いますが、広報の仕方を検討したところで、私が考えていた『より多くの人に参加』へ繋がれるかは疑問です。そこで私は『活動に参加できる工夫』ではなく、それ以前に『活動を知る機会をつくる工夫』が必要ではないかという考えに至りました。私は『知る機会』をもつ対象者として、次世代を担う子どもたちこそ必要ではないかと考え、以下のことを提案したいと思います。</p> <p>◎市内の小学校を中心に、鴨川の自然環境、防災知識などを学ぶ授業の出前講義の定期的事業展開。</p> <p>※社会科の教科書に「鴨川を美しくする会」の活動が記載されているが、『総合学習』の時間を使い、実際に鴨川に出たの見学実習や防災マップの活用方法など、鴨川の自然環境、生態環境を知る授業を小学校と連携した定期的な事業展開として行う。</p> <p>◎上記、鴨川の見学実習を行う際に、学生ボランティアを導入。</p> <p>※職員だけでは回っていかないであろうことが想定されるため、学生の街京都の利を生かし、専門知識を有する学生ボランティアを募るとよいと思う。参加してもらうことで学生が府の活動に興味関心をもつことにもつながり、将来的に活動の担い手となってくれることも期待できると思われる。</p> <p>以上、これから先も鴨川と鴨川流域の環境保全を守っていくために、次世代への働きかけを提案いたします。</p>